

資源環境経済学特別演習 II 議事録 (5月)

2012年度第1回

報告題名 非農業就業が農村経済に与える影響に関する研究—ジャワ平地農村における事例研究—	
報告者 神浦友樹 (所属分野) 国際開発学分野	日時 5月31日 午後3時～ 場所 第二講義室
座長 中村 彰宏	議事録担当者 滝田 雄基
出席者 長谷部、木谷、安江、小山田、米澤、米倉、冬木、伊藤、石井、スチン、神浦、宮里、池田、滝田、タンボウニ、中村、山口、泉井、Bayu、金、黄、今井、渋谷、室井、ナスムンク、徐、趙、劉、井坂、伊藤、井上、志賀、西田、渥美、伊藤、佐々木、青木、八木	
報告要旨 今回の報告では、博士論文の骨子と今後の予定を発表する。 インドネシアの経済発展は、都市部だけでなく農村部にも影響を与えている。経済発展が農村部にもたらす影響の一つは、農村内外における非農業就業の増加である。非農業就業の増加による農村世帯の就業構造の変化は、農村内の経済階層や世帯の生計に大きく影響を及ぼすと考えられる。インドネシアの中でも特にジャワ平地農村は、未だに農村部に貧困層を抱え、主食であるコメの生産を担っている一方、農村周辺における経済発展の影響を大きく受けている。このため、ジャワ平地農村において非農業就業が農村経済に与える影響を明らかにすることが、インドネシア全体の貧困削減と食料自給のために重要である。 この研究の目的は非農業就業がジャワ平地農村の農村経済・社会に与える影響を分析し、農村開発、農業開発に対する政策提言を示すことである。そのための課題として、1. 非農業就業が農村内の経済格差に与える影響、2. 非農業就業に関する農村世帯の就業選択と生計戦略、3. 非農業就業が農家の生産・投資行動に与える影響に取り組む。	

質疑・応答

池田：非農業就業に着目していると思うのですが、課題3つに関してはハウスホールドのデータで非農業世帯かどうかという変数を1つ加えて既存の方法をそのまま当てはめることにしたのですか？

神浦：各国で非農業就業が農村世帯の生計に与える分析は行われていて、そこでメインで扱われている話題が、経済格差に与えるものと、農家の生産や投資行動に与えるものの2つです。課題3については、日本で行われてきたインドネシアの農村の研究に自分の問題意識を加えて考えています。

池田：このトピックでユニークなところはどこですか？

神浦：こういった研究はインドネシアでは80年代以降はあまり行われていないということと、80年後半以降には実際の状態を扱ったものや非農業就業について扱ったものが少ないという点です。

石井：課題2に関して、農地市場に関する関心は持っていないのでしょうか？例えばどの程度の有用性があったりなどを評価したりしないと、こういった生産投資行動は無いような気がするのですが。

神浦：ジャワの農村の土地市場というのはある程度硬直的で、売買は親族間や産経省の間で行われることが多いので、農地を広げていくというよりは生産性を高めていくということが問題になるのではないかと思います。

木谷：非農業就業によって、経済格差が広がると考えたのですか？それとも減ると考えたのですか？

神浦：広がると予想しています。

木谷：格差があったのが開放されれば、格差は減っていくのではないのですか？どうして広がっていくのですか？

神浦：非農業就業の際は、高い教育歴が必要とされる場合が多く、富裕層のみが教育に投資ができないことがあります。教育を必要としないような就業先の場合も、自由に就業選択が行われるのではなく、社会的なネットワークの中でしか就業の斡旋が行われていないということもあり、そのネットワークから外れた人たちは職に就けないということもあります。また、こういう非農業就業が農家の省力化技術の導入を高め、それによって貧困層の農業労働の機会が減っていくということもあります。

木谷：これは農業・農村レベルの提言ではなく、国家レベルに提言が広がるとするとそっちの方の調査の方が大事だと思いますが？

神浦：このようなことは、政策でなく社会の中で自然と進んでいると思います。

木谷：政策によってそれをストップさせるということですよ。

神浦：政策によって改善するべきだと思います。実際に農業と非農業就業に対する政策のみで貧困層を救うというのは難しいかもしれませんが。

木谷：政策提言するに当たっていくらかの理想というものはあるのですか？

神浦：従来、ジャワ農村の農業が労働集約的だったのは、農業経営に必要だったと言うよりも、貧困層に労働機会を与えようという助け合いの精神があり、経済発展によってそういったものが減ってきました。理想は政策による直接的な支援というよりも、社会の中で貧困層のセーフティネットを作っていくことです。

木谷：助け合おうと呼びかけるだけというのは政策提言にはなりません。昔のような助け合いの社会と言う方向には戻れないということが前提なのではないですか？ それを守っていこうということですか？

神浦：あくまで理想としては、社会の中で解決していけばいいと思っているだけです。しかし実際そういった社会的なセーフティネットが崩れていく中で、生活保護のような貧困層を救う政策が必要かもしれません。また、非農業就業の増加は、経済格差の問題だけでなく農業問題も絡んでいて、非農業就業が増えて若い人が農業から離れるということになると、食料自給の問題や農業問題が深刻になってきます。

木谷：先進国を反面教師として捉えて、それとは異なる政策をしたほうがいいのかという研究をして欲しいです。え？ と思わせるような研究をして欲しいです。

長谷部：オリジナリティの問題・独自の視点の問題はどこなのですか？ また、3箇所では経済的データと社会的データを集めるというのは、結構準備しないと大変だと思いますが？

神浦：特に社会学的なデータというのは課題3が一番必要となってくると思うので、課題3については最悪一つの村だけになるかと思います。

池田：インドネシアは1、2、3次産業と移っていくのではなく1次産業と2次産業の間で行き来しているのが経済発展の基盤になっているという話を読んだのですが、非農業就業の人たちがまた農家に戻ってくるという流動的な動きが農家経済の生産投資行動にどういった影響を与えるのかという話はするのですか？

神浦：課題3の方で扱うかもしれません。サーキュラーマイグレーションとって、一時だけ都市部で労働をして戻ってくる労働形態があります。

池田：東ジャワでは一般的なのですか？

神浦：ジャワ全体で一般的です。

冬木：サーキュラマイゼーションは地域性や民族性で細かく見ていくと、ものすごく大きな課題となってしまうので、限定的に結論付けないといけないかと思います。また、石井先生の質問で土地市場の硬直性と言っていましたが、ここ10年はわからないので、何か新しい発見があったらオリジナリティが出るかと思っています。